

一生懸命やると

馬は必ず応えてくれる。

そこがめんこいんだ。

帯となった。「馬選びは服部さんにまかせるわ」という馬主もいて、今も初心変わらず、道内の牧場めぐりは続いている。

人馬一体で

北海道を駆けめぐる

朝6時。帯広の町が動き出した頃、すでに競馬場の中は熱気で包まれていた。早朝、馬房から出された馬は、まず広大な練習

用馬場でそりを引きながらゆっくりと周回し、ウォーミングアップを行う。それが終わると障害を越える訓練がはじまり、重さ1トンの馬体から汗が蒸気となって立ちのぼる。1頭40分〜1時間の調教は、レースのない日も毎朝続けられており、約200頭のばん馬がトレーニングをしている姿は迫力とともに、アスリートの美しさを感じさせる。現在、ばんえい競馬に所属している競走馬は約760頭、騎手32人、調教師38人。ひとつの開催が終わると約300人の人間と600頭以上の馬が、次の開催地へと移動する。

その結びつきの強さからか、黙々と練習を重ねる馬たちの横で、人々は声をかけあい、笑い、和やかな空気が競馬場を満たしていた。

「若い人はけっこう入ってくるよ。中には、お金が良さそうだからって馬にさわったことがないのもある。でも最初はそれでもいいんだわ。一生懸命仕事をする人間を馬が先に見抜く。そして、応えてくれる。やる気のある人間はそのうち馬がめんこくてしかたなくなるから」。馬のそばによると服部氏の顔が変わる。「めんこい」のが伝わってくる。「この重種馬

の競馬は北海道にしかないんだ。世界にひとつの競馬なんだからみんなで守らないと」。馬とともに4つのまちを移動し、生産牧場をまわり、さらには「ばん馬」の宣伝になるといえば、道内外どこにでも出かけていく。服部氏にとって一番落ち着く場所はどこのだろうか。馬をなでる手をとめ、ちよつと考えてから「やっぱり競馬場だな」と笑った。



北海道の馬文化

北海道は、農耕馬と文字通り人馬一体となって開拓されてきた歴史をもつ。また、サラブレッドの馬産地である日高などの牧歌的な地域は、北海道の代表的なイメージを形づくっている。近年では、競走馬としての馬だけでなく、道内各地でホースセラピー(乗馬療法)やホーストレッキングなど、馬による癒しやライディングそのものを楽しむための新しい馬文化も形成されつつある。



1「ずり引き」と呼ばれる朝の調教風景。馬の汗や息が白い湯気となって立ちのぼる 2どさんこ馬のレースと思われがちだが、開拓時代に輸入されたペルシュロン種などの重種馬が主流 3レースに出る馬は障害の登坂とスタートダッシュを重点的に調教する 4重さ1トンの馬の足をもち上げ蹄鉄を打つ。すべてが重量級の迫力だ